

河川環境保全と魚族の保護活動

ちんかぶ会

代表 山本正明

はじめに

岐阜県の最北端に位置する神岡町は、町の中心部を北アルプスの峰々を源流とする高原川が流れる。流域住民の生活は川の流れと深い関わりを持ち営まれてきた。20年程前までは、川のいたる所に遊泳区間が設けられ、夏には子供から大人まで大勢の人達でにぎわっていた。当時は、チンカブ（カジカの地元俗称）やアカザ、アジメドジョウなどの淡水魚が多く見られ子供達の良き遊び相手であった。しかし、時代と共に河川環境の悪化が進み、学童の川での遊泳が禁止され、次第に川と人とのふれあいが薄れていった。現在、川の魚達も種によっては減少傾向にあるか、もしくは絶滅の危機を迎えているものが出るなど川にとって最悪の事態を迎えようとしている。そんな状況の中、昭和57年に“ちんかぶ会”は発足した。当初6名で始まった会も現在は25名にまで増え大きな運動の輪となりつつある。高原川の清掃活動から始まった会の活動は、この6年間で、河川環境の保全や調査、そして山や緑の問題と広く範囲を拡大し、実践活動を通し地域住民への啓蒙運動を行っている。今後もこの姿勢を保持しながら息の長い運動にして行く事を会員一同確認し合っている。

1. 活動内容

(1) 高原川清掃活動

月2回（第1、第3日曜日朝7時より約1時間実施。）57年の活動開始以来、残念ながらゴミの量は減少する傾向が認められない。しかしながら、この清掃活動が会の原点であると考え、今後も長く継続してゆく予定である。

(2) 会報「たかはらがわ」発行。1～17号既刊し、町民に川への再認識を訴えている。

(3) 分収造林への参加。国有林の一部を借り、スギ、ヒノキ約3600本を植樹。造林作業を体験し山の緑の大切さを認識。

(4) 淡水魚絵ハガキの発売。高原川流域に住む淡水魚を切り絵で表現し、絵ハガキを作製

販売。

- (5) イワナ教室の開催。地元小中学生を対象に郷土の自然を知ってもらおうと学校訪問、会員が撮りためた水中写真などスライド用いての講演会を実施。
- (6) 自然保護運動。北アルプスのふもとに広がる深洞原生林の伐採計画の中止を求めて運動を展開した（結果については後述）。
- (7) 調査活動。高原川の水生生物、特に水生昆虫や淡水魚に関する調査を実施（結果については後述）。
- (8) その他。神岡町内において他団体との協力により各種事業を行い地域に根ざした運動を展開中。



高原川の清掃をするちんかぶ会の会員ら「神岡町」

高原川清掃「シーズン・イン」

神岡町のちんかぶ会 親子ら冬まで奉仕作業

吉城郡神岡町民でつくる自然愛護グループ「ちんかぶ会」（山本正明会長、会員二十二）の高原川清掃が三日から始まり、会員の親子らがゴミ袋いっぱいのおき缶やゴミを拾い集めた。

同会は同町七宝村を流れる高原川を、淡水魚のチンカブ（カシカ）が泳ぎ回るようなかつての清流にしようと五十七年に結成された。毎年降雪期を除いた四月から十一月まで、毎月一回の清掃活動を中心行事として流域住民に川の浄化と自然保護をアピールしている。

昨年は宝酒造が企画している「水と緑を守る運動・タカラハーモニストファンド」から活動助成金を受け、同川水系の淡水魚を紹介するビデオ製作、小中学校のふるさと自然教室の開催、山林の分取造林などを行った。今年はシン

ボシウムを開催するなどして住民の意識高揚を図ることにしている。

清掃は午前七時から西里橋下の高原川一帯で行われ、会員の親子が長靴と手袋姿で半日間にたまったおき缶やビニール袋などを拾い、美化に努めた。

昭和63年4月5日
岐阜新聞（朝刊）

地元の魚の生態知ろう

自然保護グループ「ちんかぶ会」 神岡西小で『ふるさと教室』

吉城郡神岡町の自然保護グループ・ちんかぶ会（山本正明会長）はこのほど、同町の

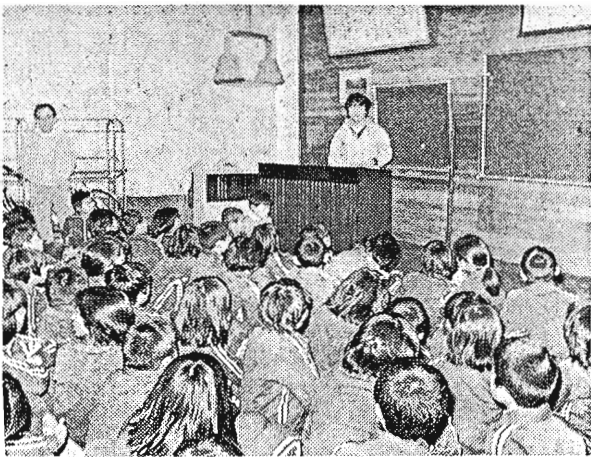
神岡西小学校（児玉守衛校長・児童四百九十九人）で「ふるさと教室」を開いた。地元

保護の大切さを話した。また、同地方の各河川に住んでいるイワナについては四季の生態を写真に収めた資料で産卵、ふ化、えさを取る行動、けんかなどをわかりやすく説明した。地元にいる魚の生態について知らない子がほとんどで児童たちは興味深く聞き入っていた。質問のコーナーでは、ダム建設で魚道が

なくなった魚への影響、魚の寿命などについて質問が出た。ちんかぶは同町周辺で呼ぶ淡水魚のカジカのこと、五十七年に川の汚染から、カジカが住め自然繁殖できなくなった。河川美化を目指して名づけた。会員は二十人で、高原川の清掃奉仕活動や原生林保護などに取り組んでいる。

同教室は学年集会の時間を活用して開かれ五、六年生約二百人が受講した。講師は同会会員で三重大学水産学部を卒業、地元で淡水魚の研究を続けている同町花園、中野繁さん（三）と同町殿本町、徳田幸憲さん（三）の二人。

一昨年から二年間かけて同町と上宝村の高原川、双六川、山田川などで水中撮影した魚の生態写真を中心に六十枚のスライドを使って、魚はきれいな水を好むことを紹介。河川が汚染すると魚が住みづらくなることなど、自然



ふるさと教室で地元で生息するイワナを中心とした生態を紹介するちんかぶ会会員＝神岡西小で

昭和63年1月27日
中日新聞（朝刊）

2. 自然保護運動の成果

(原生林保護運動)

深洞原生林は北アルプスのふもと標高約1400m付近に広がる原生林である。200haほどの林内には湿原が発達し、林床にはミズバショウ、リュウキンカ、コバイケソウなどの草本類がみられる。森を構成する樹種は、ブナやミズナラなどの落葉広葉樹とコメツガ、トウヒなどの針葉樹である。北アルプス周辺の低山帯における原生林が次々と伐採されてゆく中で深洞原生林は非常に貴重な存在であると考えられた。しかしながら、この原生林も決して伐採対象の例外ではなく、営林署の計画により、周辺には林道が附設され伐採の危機がせまっていた。

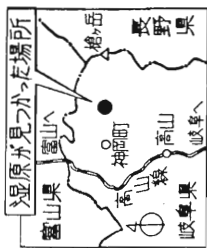
ここ北アルプス周辺においても現在では少なくなった原生林を、原始からの営みを続ける動植物の生活環境を人の手が破壊しようとしているのを見過ごせないと会は反対の声を上げた。雪深い早春、芽ぶきの5月と何度か現地の視察調査に足を運ぶうち、会員以外の地元の方々も多数参加し、保護の声の高まりをみた。この動きにマスコミも大いに連動し数回にわたり紙面を飾った。管轄する名古屋営林支局もこの動きに62年6月、「原生林の伐採中止……」を打ち出し自然保護の立場を発表した。会は同年7月に地元神岡町へ要望書を提出。5項目にわたり具体的な保護対策を訴えた。“自然に恵まれ生活していた私達が余りにもその恩恵を当然のものとして受け止めるだけで無策でありつづけたともいえます……”と始まる要望書に町当局側充分検討し、今後の活用方法を考えてゆきたいとのことであった。

結果的には当初の「自然観察教育林」から最終的にはさらに規制の厳しい「学術参考保護林」として最終的な指定が為された。営林署からの入山許可も学術的調査目的以外は下りず原生林が永久的に保護されることになった。

—— 学術参考保護林 ——

貴重な動植物を保護し、自然を学ぶ場として活用する森林。岐阜県内5カ所をはじめ名古屋支局管内で7カ所の計100haが指定されている。今回の同地域217haの広大な原生林が指定されたのは初めてのことである。

標高1400メートルづく大湿原



標高があるのは、神岡町の東部。標高一、三〇〇メートルから一、四〇〇メートルにかけて、蛇行する川に沿って帯状に広がっている。面積は約三公顷。周辺部の湿地帯を含めると、その数倍になりそうだ。地元森林整備協議会の一部職員には以前から知られてい

たが、最近林道が近くまで通わり、注目されるようになった。岐阜県内の大規模な湿原としては、郡上郡高鷲村のひるがの高原、吉城郡宮川村の地方高原などが知られているが、それ

岐阜・神岡町の国有林

群生するミズバシヨウリョウウミンカ、ワタスギなどを生えさせる。岐阜県吉城郡神岡町で



岐阜県吉城郡神岡町の国有林内でこのほど大規模な湿原が見つかった。ミズバシヨウリョウウミンカが一面に生えているほか、ワタスギをもち、ワタスギの群生も確認されている。地からは観光地化を含めて保護を求める声も上がっており、名古屋森林整備は、森林の用途を定める森林基本計画が今年度中に一斉に位置されるのに合わせて、教育林が自然体森林に移した扱いで保存して行く方針だ。

ミズバシヨウ・ワタスギ…

周辺含め保存

に匹敵する規模だ。

営林署がこれまでに確認した植物は、ミズバシヨウリョウウミンカ、ニッコウマダ、ワタスギ、エンレイソウなど草本植物が三十種あり。樹木はトウヒ、コナツガ、ブナなど三十数種類の高木に達して、オオカマドやイヌツグ類、シラカバなど高山帯に生える樹木もある。この湿原のミズバシヨウは、雪の降り方の関係から高い場所から低い場所へ咲き進む特徴を不ずともわかった。

林野庁は、国有林を維持する立場から、切れる木は切る方針をとってきた。このため、各地で自然保護団体の衝突してきたが、昨年暮れ、林政審が林政の基本方向として「自然保護をより重視した森林施策の推進」を打ち出したことから方針を転換。必ずしも木を切らなくてもいいという観点で、今年度森林施策の計画を策定することになった。名古屋森林整備協議会では、湿原だけでなく岐阜城三百年記念部を採掘員合わせ地区とする考えだ。

深洞原生林は教育林に

神岡町

保護団体が要望書

住民の親しめる場訴え



要望書を上手清重神岡町助役に手渡す山本正明
ちんかぶ会会長ら＝神岡町役場

【神岡】吉城郡神岡町の住民でつくる自然保護グループ・ちんかぶ会(山本正明会長)は二十二日、北アルプスのふもとにある深洞(ふかど)原生林の活用法に対する要望書を田口喜一同町長に提出した。教育林としたい、という内容になっており、今後同町と地元住民が話し合い深洞原生林の用途を決める。

深洞原生林は同町と上宝村にまたがる金木戸国有林にある、広さ二百七畝の亜高山帯の森林で、広葉樹のブナ林が取り囲む中に百畝の針葉樹林帯と五十畝の湿原がある。中には二百種以上の植物と動物、昆虫、魚類があり、そのままの自然の宝庫として注目されている。

深洞原生林を管轄する名古屋営林支局は原生林周辺の伐採を計画していたが、国有林の施業計画見直しに併せて地元から保護の声が高かった深洞原生林の伐採を中止する方針を固めた。伐採計画変更を林野庁に上申するには原生林の今後の用途を示さねばならぬため、同営林支局は地元の意向を尊重するためにも、同町に活用法の希望を示すよう求めている。

ちんかぶ会は昨年行った深洞原生林視察後、国民の貴重な財産という考えから神岡営林署に伐採計画中止を陳情。同営林支局へも保護の声を届けるなど伐採中止を決める一歩の力となってきた。今回、保存方針が固まったことから深洞原生林のある神岡町山村地区の住民や会員と話し合いを行い、町に住民の意向を伝えようと要望書を出すことにした。

要望書は五項目から成っており、基本となる考え方は乱開発による自然破壊を避けながら教育林として整備し、多くの人が深洞原生林に親しめるようにすること。具体的に▽生態系の調査を実施する▽教育林として学校教育に採り入れる▽自然保護PRと安全確保のため観察道路、案内板、説明板などを最小限設置する▽車両の乗り入れを禁止し、ゴミの持ち帰りを徹底する▽林道周辺の択伐を最小限にとどめるよう働きかける▽との要望が記されている。

神岡町役場には山本会長ら四人の会員が訪れ、上手清重同町助役に要望書を手渡した。上手助役は「原生林の保護を第一としたい。これから原生林の管理をどこが行うのか営林署などと話し合うところで、その点も住民の要望を考慮したい」と話していた。

昭和62年 7月23日
岐阜日々新聞

飛驒・深洞

原生林 守られた!!

住民の熱い願い実り 『自然観察林』で保存

名古屋営林支局が英断

【神岡】名古屋営林支局は、林政審議会の自然保護重視や地域住民の強い訴えで北アルプスのふもと、岐阜県吉城郡神岡町と上宝村にまたがる金木戸国有林・深洞（ふかど）原生林の伐採中止を打ち出していたが一日、同原生林を自然観察教育林として指定、保存することを決め、地元へ伝えた。現地の意向を全面的に尊重した処置に、原生林の保護を求めていた神岡町と同町の自然保護団体「ちんかぶ会」（山本正明会長）は、町民たちの熱意で願いがなつたと喜んでいる。

湿原保存の方法としては一部の限られた研究者だけを対象とした学術参考保護林などの指定も検討した。学術的に



住民の熱意で自然観察林として保存される深洞原生林＝岐阜・神岡町で

貴重な植物群を形成している原生林を多くの人の教育の場として生かすには、現地をそのまま残す自然観察教育林が最も適切なことから基本方針を決め、橋本智同営林支局計画課長が田口喜一同町長、同会代表に会って伝えた。

教育林指定は、地元の申請で一般の勉強の場に生かすこととなる。現在は現地に歩道や防護さくがないため、一度に多くの人が入ると自然植生などが損なうのは必至。このため、当面は学術調査を除き立ち入り制限して保護。木道などの施設を整え次第、利用してもらう方針。

田口町長は「地元の要望に沿った保存で喜んでいる。近

い将来に木道などを設け自然教育の場として活用させてもらう」と話している。営林支局は地元の活用法を盛り込んだ要望書をまとめ、来年三月に林野庁へ上申して承認を得、正式決定する。

深洞原生林は同町中心地から東へ約三十キロ。標高一、三〇〇メートルから一、五〇〇メートルで二、百七拾。中央に川をはさみこのうち四十拾が湿原。一帯には高原を象徴する湿原植物約百種のほか、二十余種の原生林があり、東海地方でも数少ない自然の宝庫。第四次施業計画（六十年一六十九年度）で一部の環境を保全しながら

3. 調査活動の結果

(高原川の魚類保護に関する調査)

高原川は穂高、乗鞍及び双六岳などの北アルプスの3000m級の高峰に源を発し岐阜県最北に位置する上宝村、神岡町を北西方向に流れる。岐阜—富山県境において神通川となり富山湾に注ぐ。双六谷をはじめとする13以上の支流群を有し、全長は約60km、流域面積は781.6km²に及ぶ。高原川水系は全体が山地溪流の景観を呈し、昔からイワナ、ヤマメなど溪流魚の宝庫として知られてきた。しかしながら、近年、当水系のいたる所で河川改修工事、砂防ダムの建設及び森林の伐採などと言った魚類の生息環境の破壊が進みつつある。そこで、当会は、今後における高原川水系の魚類の保護を考えるための第一歩として、現在における魚類の生息状況を調査した。イワナとヤマメに関しては、さらに詳しい生態調査を実施した。以下には、魚類の生息状況の調査結果について、簡単に述べる。

—— 高原川の淡水魚の生息状況 ——

本流及び支流において確認された魚種を表-1に示す。高原川水系において観察もしくは採取できた淡水魚は15種であった。ただし、ニジマスやアユなど当水系における繁殖の確認が出来ない魚種を除くと9種となる。これは決して多い数字ではないが、流れが急勾配で、年間を通して水温の低い当水系においてはむしろ当然と言えるかもしれない。しかしながら、これら数少ない生息魚種についても、近年急速にその数が減少したと考えられるものが多いと考えられた。

なお、イワナ及びヤマメの生態調査の結果については、資料の整理が終了しだい出版物等に発表してゆく予定である。

表 1 高原川水系の淡水魚の分布

魚種	高原川本流										支流													
	高	新穂	板尾	浅井	船津	割石	牧	横山	平湯	笠谷	下左	谷	谷	白	沢上	双六	蔵住	麻生	吉田	山田	跡津	ソ	ン	
イワナ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヤマメ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ニジマス*		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
アユ*		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ウグイ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
アブラハヤ		○																						
オイカワ*		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
コイ*																								
ギンブナ*																								
ドジョウ																								
アジメドジョウ																								
アカザ																								
カジカ																								
カワヨシノボリ																								
ウナギ*																								

*: 繁殖が確認されていない魚種, s: 放流が行われていない場所, r: まれ



川の清掃活動



イワナ教室



深洞原生林の中の湿原



高原川のイワナ（イワナ教室のスライドより）